

目指せ！甲子園

百合の花

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

明法学園高校―

去年まで女子高だった高校。一流の設備を持っているにも関わらず野球部の部員は僅か3人。果たして高校球児の憧れ甲子園に行けるのか。そもそも部員は集まるのだろうか。

# 目次

## 第1章 部員集めと顧問

|           |    |
|-----------|----|
| 甲子園を目指す？  | 1  |
| 女子新入部員登場  | 4  |
| 顧問と男子新入部員 | 7  |
| 初めての抽選会   | 11 |
| 1回戦開始     | 16 |
| 強力打線への対抗策 | 21 |
| 強敵！国際学院高校 | 26 |
| 開戦        | 30 |
| 揺さぶり      | 36 |
| 第2の作戦     | 41 |
| いよいよ      | 46 |

準々決勝開始



# 第1章 部員集めと顧問

## 甲子園を目指す？

明法学園高校グラウンド

3人の女子高生が部活終わりの整理運動をしていた。

「部員何人入ってくるかな〜？」

先程まで投球練習をしていた女の子が言う。

「試合したいから6人は欲しいね」

キャッチャーをしていた女の子が返す。

「出来れば男の子も欲しいー」

外野から送球の練習をしていた女の子も反応する。

明日は入学式。それと同時に女子生徒の部活動勧誘日である。今年から男子生徒も入学しているのだが、混乱を避けるためか男子生徒の部活動勧誘日は女子生徒よりも後に設定されている。

投球練習をしていた女の子の名前は白崎真希。最速145キロのストレートに変化量と同じシユート、フォーク、スローカーブを持つ左投げのスリークオーター的好投手

である。

キャッチャーをしていた女の子は本条結衣。キャプテンを務めている強肩強打の捕手。リトル時代は男の子に混じりながら4番を打っていた。

外野をやっていた女の子は川崎麻衣。俊足の外野手で陸上部からも勧誘を受けたらしいが断つたとのこと。ずっとセンターをしていたのでレフトやライトは嫌らしい。

全員2年生に進級したばかりである。

白「部員も良いけどさ、結衣、顧問はどうするの？」

本「気になる？」

川「それはそうだよ。部員が集まっても顧問がいないんじゃない大会に出られないし」

本「大丈夫。条件付きだけど顧問引き受けてくれる先生見つけたから」

白「流石だね。でもその条件は？」

本「部員を9人以上。つまり試合出来る状態にすること」

川「なら勧誘が勝負だね。ところでその先生って誰？」

本「それは言えないのよ。裏取引したみたいだから他言無用って言われてね。けど9人集まれば自ずと分かるでしょ」

白「それもそうだね。選手だけじゃなくて記録つけられるマネージャーも欲しいね

」

本「何も考えていないようで意外と考えてるのね真希は」

白「意外は余計だよ」

本「アハハ。ゴメン。しゃべり方からつい」

川「でも勧誘も難しいかもね」

白「なんで？」

川「野球部は長期休み以外寮暮らしだからそこがネックになるかもしれない」

本「それだけじゃないわよ。大浴場や部屋外のトイレは別々とはいえ、理事長の方針で男女同室。私達は気にしないけど他の子はどうか」

白「結衣。理事長の娘なのによく反対しなかったね」

本「言ったでしょ。私達は気にしないって。私としても男の子とは話してみたいし」

川「それはわかるかも」

本「とにかく明日は頑張るわよ。出来れば明日で6人以上欲しいんだから」

白「私も頑張るよ。チラシも完璧だし」

川「真希は声かけで私と結衣は説明よね？」

本「うん。じゃあ、今日は解散。寮に戻りましょう。」

## 女子新入部員登場

白「困ったね〜」

本「うん。まさかね」

川「こりや、参ったね〜」

3人は部活終わりに話していた。

部員は期待以上に集まった。

まずは早川あおい。緑色の髪の毛で右のアンダーローの投手。シンカー系のマリ  
ンボールが自慢らしい。

さらに同じ投手で橘みずき。左のサイドスロー。水色の髪でスクリュー系のクレツ  
セントムーンという決め球を持っている。

また、太刀川広巳。銀髪の左のオーバースロー。スライダー、カーブ、フォークを投  
げられ、他の2人よりスタミナもある。

捕手としては六道聖。紫の髪。スローイングには難があるがボールを見る目とリー  
ドワークは一級品。

一塁手は川星ほむら。ピンクの髪。パワーは無いものの足の早さには目を見張るも



のがある。

三塁手は大空美代子。茶髪のおっとりした感じだが打撃練習では一年生で一番のパワーを見せつけた。

遊撃手は小山雅。金髪で穴がないが特にミート力と守備力に秀でている。

外野手は美藤千尋。青い髪の毛でソフトボール経験者。バットコントロールが巧みな選手。

さらに柳生鞘花。黒髪。実家が道場らしくメンタルが非常に強い。

その他、捕手では美園千花、小鷹美麗、遊撃手の小嵐リョウ、外野手の八尺巫女子が  
良いセンスをしている。

他にも何人か入部し、レギュラー争いをする。

そう、部員は質、量共に期待以上だったのである。

白「二塁手だね〜」

本「コンバート考える?」

川「誰も受けてくれないよー」

見事に二塁手経験者が一人もいないのである。

白「男子に賭ける?」

本「危険よね。男子が入ってくるかも微妙なのに」

川「男子は各部活が激しい争奪戦するからねー」

白「今すぐに解決策は思い付かないな」

本「本当ならコンバートさせるんだけどみんな未経験のポジションやれって言われたら戸惑うよね」

川「私もレフトやライトは嫌だからー」

白「大丈夫だよ。男子が体育会系の部活を選びやすいように結衣のお父さんが巨額の投資で設備を充実させたんでしょ？」

本「真希、これからは理事長と呼んでね。私が理事長の娘だつてことは新入部員にはあまり知られたくないの」

川「なんで？」

本「それが知れると私に意見することが出来にくくなるでしょ。確かに私はキャプテン。だけど野球は一人じゃできないから。他のみんなが監督や私の言う通りにしか行動しないんじゃないかと一緒よ」

白「なんか難しい話になってきたね。まだ勧誘まで日は有るから他の事考えよ」

本「真希のせいなんだけど」明日は顧問の先生紹介するわ。いわゆる監督ね」

川「楽しみだなー」

本「(9人は満たしたけど2塁手がいないからダメとか言わないと良いけど)」

## 顧問と男子新入部員

本「えっ？何故ですか？」

？「野球できる状態じゃないでしょ」

本「そんなことないです。部員は9人集まりました」

？「なら聞くけどセカンドは誰？」

本「まだ決まってませんけど練習で適性を見ます」

？「やっぱりね。私は甲子園を目指したいの。甲子園を目指せる野球部でない顧問するつもりはないわ。そんな急ごしらえのセカンドじゃ甲子園にはいけないでしょ」

本「そんな！約束が違います！」

？「私はきちんとしたセカンドがない以上、野球できる状態じゃないと見なすの。セカンドを探してからおいで。そうしたら本気で顧問やつたげるから」

本「…絶対ですか？永野先生」

永「それは約束するわ。誓約書を書いたって良い」

本「いえ、信じますよ。セカンドそろえてみせます」

本「てなことで顧問引き受けて貰えなかつたの」

白「永野先生か。適任だけどそれはきついね。」

川「入る目星はいるのー？」

本「それがいいのよ。ああ言った手前そろわせたいけど」

白「代わりといつちやなんだけどマネージャー2人勧誘してきたよ。」

本「そういえばマネージャー希望は入部していなかつたわね」

白「紹介するね。入って。」

? 「はい」

白「じゃあ自己紹介してくれる？」

? 「はい。明星雪華です。料理部と掛け持ちですががんばります」

? 「倉家風です。よろしくお願いします」

本「明星さんに倉家さんね。私はキャプテンの本条結衣。よろしくね」

明「よろしくお願いします」

倉「よろしくお願いします」

本「(あとは男子部員に賭けるしかないわね)」

男子勧誘日

野球部は各部活との争奪戦の末、2人の部員を獲得できた。

本「じゃあ2人も自己紹介してくれる？」

？「はい。林光太です。シニアで野球しました。ポジションは外野なら全部守れます。主にセンターだったのでセンター希望です」

川「(わお。私と争うんだー)」

本「(あと一人。お願い。セカンドでありますように)」

？「串田文人です。同じくシニアで野球しました。ポジションは投手としてストッパー、野手としてはセカンドやってみました。投手は何人もいそうなのでセカンド希望します」

本「セカンド!？」

白「(ドラマチックな展開だね)」

川「(こりやすごいわー)」

串「(ビックリした) はい。そうですけど。何か問題ですか？」

本「ううん。その逆よ。セカンドがいなくて困ってたの。早速で悪いんだけど一緒に職員室まで来てくれない？」

串「はい。分かりました」

職員室

本「とうわけで彼がセカンドです」

永「まさか本当にそろえるとはね。彼の實力は私も知ってるし。約束だし良いわ。顧問兼監督引き受けてあげる」

本「ありがとうございます」

永「そうと決まれば早速仕事しないとね。とりあえずユニフォームの発注と同好会の部への昇格手続はやったげる。他に何かある？」

本「一応、紹介したいので後でグラウンド来て下さい」

永「分かったわ」

本「今回は運が良かったわ。あとは戦えるレベルにもっていただけね」

# 初めての抽選会

永「こんなところかしらね」

野球部顧問永野加奈子はそうひとりごちた。

元々高校球児だった彼女だが、其をひた隠しにして生きてきたのである。

永「どうやって知ったのかしら?…いや、それしかないか。理事長もお喋りね」

本条結衣は恐らくその事を知って顧問を頼んできた。それは理事長が娘に喋ったこととは推察できた。

永「最初はどうかと思っただけどレギュラーは決定ね。発表は辛いけど」  
翌日

永「じゃあレギュラー発表するわよ。」

1 白崎

2 本条

3 川星

4 串田

5 大空

6 小山

7 林

8 川崎

9 美藤

10 早川

11 橘

12 太刀川

13 六道

14 小鷹

15 小嵐

16 柳生

17 八尺

18 西野

19 前田

20 美園

「予選はこれで行くわよ。甲子園に行けたらベンチ入りは18人に絞られるからレギュラーも油断しないようにね」



レギュラーに選ばれた選手は喜び、外れた選手は次こそはと頑張る。3年生がいないので諦める選手はいない。

本「じゃあ引き続き練習ね。明日は組合せ抽選会だから遅れないようにね」

翌日

本「流石の緊張感ね」

白「初めてだから特に慣れないね」

川「凄い数だね」

白「結衣、良いところ引いてきてよ」

川「出来るだけ勝ち進みたいからね」

本「無茶言わないでよ」

串「何処でも良いですよ。強い相手と当たっても勝てば問題無いですから」

林「むしろ強い所と当たりたいです。番狂わせを起こしたいから明法に入ったんですから」

本「そうね。ありがと。気楽に行くわ」

アナウンス「続きまして明法学園高校」

会場から様々な声が聞こえる

「聞いたことあるか？」

「いや、知らないな」

「なんでも新設らしいぞ」

「うまいこと初戦であたりたいものだな」

「女性がキャプテンかよ。ふざけてんのか」

「女しかないんじゃないか」

本「(やつぱりナメられてるわね。気にしないでいくけど)」

アナウンス「5番」

抽選会終了後

白「1回戦は鉄道高校だね」

川「勝てばおそらく星座高校かな」

本「3回戦でシード高の国際学院ね」

白「まあ先ずは1回戦だね」

川「結衣。データ分析はこれから？」

本「うん。一応データは監督からもらったけど分析は済んでないわよ」

白「私も参加して良い？」

本「良いけどすごく大変よ。これ」

白「打者の特徴知りたいし」

本「確かに真希は知っておいた方が良いわね」

白「それでその資料は何処？」

本「部室にあるわ。行きましょ」

ガチャ

林「あ、先輩。お疲れ様です。」

本「お疲れ。何してるの？」

串「マネージャー2人と協力して4人でデータ分析です。今ちょうど終わりました。」

白「凄いね。今からやろうとしたのに」

本「ちよつと見せてね。∴凄いわね。分かりやすく書いてあるし。これは役に立つ

わ。資料は誰が作ったの？」

明「みんなで協力しました」

倉「まとめと分析と両方やりましたから」

本「そう。ありがとね。助かったわ。早速ミーティングに使いましょ。」

# 1回戦開始

白「いよいよ始まるね〜」

川「とりあえず出られて良かったかな〜」

本「スタメン決まったわよ」

? 「さあ始まります。地方予選1回戦第二試合。実況は私山田が担当します。」

スターティングメンバー

明法学園

1番 センター 川崎

2番 レフト 林

3番 セカンド 串田

4番 キャッチャー 本条

5番 ピッチャー 白崎

6番 ショート 小山

7番 サード 大空

8番 ライト 美藤

9番 ファースト 川星

鉄道高校

1番 ショート 颯

2番 セカンド 希

3番 ピッチャー 光里

4番 ファースト 小玉

5番 キャッチャー 朱鷺

6番 センター 隼

7番 レフト 小町

8番 ライト 那須野

9番 サード 浅間

永「予想通りのオーダーだね。データは頭に入ってるわね。後攻だから守備からリズムを作るわよ。」

皆「はい。」

一回表 鉄道高校の攻撃

1番の颯がバッターボックスに入る

本「(足に警戒しなきゃね。最初はこれで)」

白「(インハイストレートから)」ビシユッ

颯「マジかよ。女のくせに良い球投げるな)」

戸惑った颯をセカンドゴロ、希を三振、光里をショートゴロに仕留める。

本「ナイスピッチ！」

白「ナイスリードゥ」

一回裏 明法学園の攻撃

川「まずは塁に出ないとねー」

光「うりゃ」ビシユッ

川「(速いねー)」

審「ストラック」

川「(コントロールも良さげねー)」

光「うりゃ」

川「(マッコー)」ブント

審「ストライク」

光「うりゃ」

川「(えいっー)」ブント

審「ストライクアウト」

川「相当打ちにくいわよー。気を付けてー」

林「分かりました」

光「シニアで野球してた林か。よくこんな無名校に入ったもんだ。足は早かったが当てさせなければ関係ない」

林も今日初めて見たシユート、カーブ、ツーシームで三振に倒れる。

林「キレてるぞ。気をつけろ」

串「分かった。」

白「(投手戦になりそうだねー。一点勝負かもー)」

本「(スタミナが切れてくる後半勝負かしら)」

川「(三巡目からかなー。お互いに)」

カキーン

白「えっく？」

本「えっ？」

川「えっー？」

山「入ったー。先制点は明法学園。串田の先制ホームラン」

白「凄い。」

本「とんでもないルーキーね」

川「あらー。」

永「(変ね。確かに今のは甘かったけどこれだけの投手ならもつと勝ち進めそうなの  
に)」

カキーン

山「入ったー。二者連続のホームラン。」

永「なるほどね」

川「なにがなるほどなんですか?」

永「あのピッチャーならもつと勝ち進めそうなのにおかしいと思わなかった?」

林「そう言えばそうですね」

永「おそらく点を取られたら脆いみたいね。一点どうにか取ってしまえば楽なはず  
よ」

永野の予想は的中し、明法学園は勝利した。

明法学園 1000 鉄道高校(五回コールド)



## 強力打線への対抗策

1回戦をコールド勝ちした翌日

白「やっぱり星座高校が相手だね〜」

本「チームカラーが鉄道高校とは全然違うわね」

川「1回戦が17-13とはねー」

林「典型的な打撃のチームですね」

小「対抗策は有るんですか？」

本「何ともね。こんな強力打線見たことないし」

串「うーん。でも大したことないと思いますよ」

白「なんで〜？」

串「星座高校は9回で17点ですよね？」

本「ええ。そうだけど」

串「うちは5回で10点ですよ。相手投手のこともあるので一概には言えませんが打撃力は互角じゃないですか」

本「確かに。言われてみればそうね。でも対策はたてないと。」

翌日

永「お待たせ。ミーティング始めましょう。次の相手は星座高校。強力打線が売りよ」

本「監督はビデオを見てたんですよね？私達も昨日見て煮詰まっちゃうんですけど対策はありますか？」

永「何度も考えたんだけど明確な対策はないわ」

白「え〜？それじゃ〜」

永「真つ向勝負で打ち勝つしかないかな」

川「でも望むところですよー」

串「……」

夜 監督室

コンコン

永「どうぞ」

串「失礼します」

永「どうしたの？一人で来るなんて？何か悩み事？」

串「いえ。2回戦のことです」

永「不安で眠れないとか？」

申「何で対策を示さなかったのかなと思ひまして」

永「言ったでしょ。個人個人の癖もないし対策はないわ」

申「個人個人は確かに無いですけどチームとしては」

永「！まさか：見つけたの!？」

申「はい。説明しますね」

試合当日

永「今日も後攻よ。早い段階で点取りましょう」

スターティングメンバー

星座高校

1番 ライト 牡羊

2番 ピッチャー 蠍

3番 キャッチャー 牡牛

4番 ファースト 乙女

5番 ショート 双子

6番 センター 射手

7番 レフト 天秤

8番 サード 山羊

9番 セカンド 水瓶

明法学園

1番 センター 川崎

2番 レフト 林

3番 セカンド 串田

4番 キャッチャー 本条

5番 ファースト 白崎

6番 ショート 小山

7番 サード 大空

8番 ライト 美藤

9番 ピッチャー 太刀川

山「実況の山田です！これは驚きました。強力打線を誇る星座高校にエース温存とは！解説の田中さん」

田「次の国際学院がデータを重視する野球をするので隠したいってところですかね。しかし、これは悪手でしょう。ここで負ければ次はありませんからね」

永（それもあるけど違うのよね。本質は）

永「一巡目は見てくる？」

串「ええ。ビデオを見ると一回から三回まではヒットがありません。しかも誰一人バットすら振っていません」

永「確かにそうね」

串「これはおそらくですけど、一巡目は球筋を見て二巡目から打ちにくる作戦なんですよ」

永「じゃあ勝利の鍵はー」

串「継投策です」

## 強敵! 国際学院高校

一回表 星座高校の攻撃

全員見逃し三振

本「凄いわね。作戦通りだけど」

白「いつ相手が気付くかだね」

本「いつも思うんだけど真希はホントに全く考えてないようで鋭いこと言うのね」

白「それって貶してるく?それとも褒めてるく?」

本「褒めてるつもりだけど。ただ、意外だなって」

白「褒めてるならいいかな」

一回裏 明法学園の攻撃

川「よーしー。塁に出てくるよー」

カキーン

山「センター前ヒットー。先制のランナーが出ました」

林「俺の役目は次の塁に進めることだけどサインは?」

永「(送る必要ないわ。この投手なら打てる)」

林「なるほど。ならアレいってみるか」

コンッ

山「おーつと。セーフテイバント。完全に意表をつかれました。どこにも投げられない」

串「さてと先制してきますか」

本「頼むわね」

ドカッ

串「イテッ」

山「おつと。デッドボール。手元狂ったか」

白「大丈夫かな〜？」

永「利き腕じゃないし、走ってたから大丈夫なはずよ」

本「じゃあ私が打つね」

キン

山「打ったー。左中間へ走者一掃のタイムリーツーベース」

白「私も今日は打つことに集中しよ〜」

その後も打ち5点を先制した。

山「三回が終了し9対0です。明法学園のリード」

蠍「監督。もう良いですよね?」

監「ああ。二巡目だからな。うちの打線の恐ろしさを思い知らせてやれ」

アナウンス「明法学園高校選手の交代をお知らせします。ピッチャー太刀川さんに代わりまして早川さん」

蠍「何っ?」

監「何だと?」

蠍「どうしますか?あの投手も初めてですよ」

監「また見たらコールドで負けるな。仕方ない。真つ向勝負だ。ホームラン狙っていけ」

本「力んでるわね。完全に本塁打ねらい。あおいのカモね」

ストレート狙いの相手打線を変化球であっさり抑え、四回裏に点を取り、コールド勝ちした。

白「順調だね」

本「次はそうはいかないわ」

川「国際学院だもんね」

白「何か情報ある?」



林「ありますよ」

串「シニア時代に対戦した選手いますから」

本「それは良いわね。教えてくれる？」

林「国際学院高校。その名の通り、外国人選手を3人擁しています」

串「まずはピッチャーのレオン。アメリカの選手です。シニア時代にノーヒットノーランやってます。最速150キロの速球と90キロの変化の大きいスローカーブが武器です」

林「センターのマイク。ドミニカの選手です。ミート能力も高く、50m6秒1の俊足です」

串「ファーストの李。韓国の選手です。シニアの全国大会でホームラン王取ってます」

林「全部中学時代の能力なので今は成長してるでしょうですけど」

本「他のメンバーは？」

串「とるに足りないと思います。今までの試合もレオンが抑えてマイクが出塁。李が返す。このパターンですから」

林「レオンが打たせて取るのではなく、三振を取るタイプなので守備力もあまり…」

本「強敵ね」

# 開戦

時は流れて3回戦当日

本「良い？みんな。今日は大一番よ」

白「気合いいれて行こうね」

川「こんな所で負けられないよ」

山「実況の山田です。さあいよいよ始まります3回戦。両チームのスタメン発表です。」

## 国際学院

1番 センター マイク

2番 レフト 佐藤

3番 キャッチャー 武

4番 ファースト 李

5番 ピッチャー レオン

6番 サード 渡辺

7番 ライト 池田

8番 ショート 木村

9番 セカンド 大島

明法学園

1番 センター 川崎

2番 レフト 林

3番 セカンド 串田

4番 キャッチャー 本条

5番 ピッチャー 白崎

6番 ショート 小山

7番 サード 大空

8番 ライト 美藤

9番 ファースト 川星

本「相手は3番が代わってるわね」

串「これは厄介なことになりましたね」

林「まさかあいつが国際学院にいるとは」

白「知ってるの〜？」

串「ええ。シニアで対戦しました」

林「俺に至っては同じチームです」

本「力はどれくらい？」

林「馬鹿力ですよ。しかもミートも上手く、チャンスにも強い。」

本「チャンスで回したくないわね」

永「今日も後攻よ。しっかり守りましょう」

一回表 国際学院の攻撃

本「(塁に出したくないわね。真希の球は速いからバントは出来ない。定位置で良い)」

白「(初球はストレートね)」ビシュッ

マ「フッ」キン

山「二遊間！抜けたかー？」

小「っ！」バシッ

マ「(飛び付いたか。けどその体勢じゃ間に合わない)」

小「串田くん！」シユッ

串「ナイス」シユッ

審「アウト」

マ「何っ？」

山「スーパープレーが出ました！ショートの小山が捕ったボールをトスしてセカンドがスロー！素晴らしい連携です。」

白「(危なかつた)」

本「(今後とも要注意ね)」

2番を三球三振に仕留め3番の武

白「(どうする?)」

本「(新しく覚えたムービング使うわよ。当てるのが上手いならバットには当たるけど芯は外れるわ)」

白「(オツケ)」ビシユツ

武「フツ」ギン

小「オツケー」パシツシユツ

審「アウト」

本「ナイスピッチ！」

白「ナイスリード。肝が冷えたよ」

一回裏 明法学園の攻撃

川「あの作戦行くー？」

林「行きましょう」

串「いきなり使ってからこそですからね」

川「オツケー」

レ「フツ」ビシュッ

川「っ！」コンッ

山「おーっと。初球セーフティバント。完全に意表をつかれました。ランナー出ました。」

林「俺も自分の役割を果たさないとな」

レ「フツ」ビシュッ

川「ここだねー」ダッ

李「走った！」

林「よしっ」コン

山「サード前に転がった。渡辺捕って一塁へ。おーっと。川崎二塁を蹴った。三塁ベース上誰もいない。ワンアウト三塁」

レ「くそっ」

串「(千載一遇のチャンス。無駄には出来ないな)」

武「(打たせてくるだろう。変化球で詰ませよう)」

レ「フツ」ビシュッ

串「狙い通り」コンッ

山「スクイーズー！明法学園先制ー！」

永「さあどンドン揺さぶるわよ」

## 揺さぶり

奇襲作戦で先制した明法学園

本「(このまま崩れてくれれば楽だけど…)」

ビシユツ

審「ストライク」

本「(やっぱりそうもいかないわよね…。なら第2の作戦行くしかないか)」

2ストライク後8球粘り打ち取られた。

2回表

国際学院の攻撃

李「お願いします」

本「(来たわね。要注意人物が)」

白「(どうしよつか?)」

本「(1点勝ってるから同点までなら良いけど。ギリギリ攻めて行きましょう。歩かせても良い。出来るよね?)」

白「(もちろん!)」



ビシュツ

李「っ！」

ストライク

本「(ん?もしかして)」

ビシュツ

李「っ！」

ストライク

本「(今ので予感が確信に変わったわ。このバッター選球眼悪い。ならこれで)」

白「(ストライクからボールになるフォークだね)」

シュツ

李「っ！」

ストライクアウト

その後の打者もしっかり打ち取り0点で締めた。

2回裏、3回表、3回裏は三者凡退

4回表

国際学院の攻撃

本「(さてとどうしましょうかね)」

白「(1打席目は運良く免れただけでもんね〜)」

本「歩かせるわけには行かないし。さつきはストレート打たれたから変化球で行きましよう)」

ビシュッ

マ「カーブか。変化球攻めか？球種が分かってるのフォークとカーブだけに絞りにくいな)」

ビシュッ

マ「(スライダーも持つてるのか。なら最後はフォークに絞るしかないな…と普通は思うが)」

本「(これで最後はフォークの意識は出来たはず。インハイにストレートで行きましよう)」

白「(上手くいきすぎてないかな〜？何か不安だけども)」

ビシュッ

マ「(狙い通り!)」

カキーン

山「打ったー!右中間へスリーベース!」

本「タイム」

審「タイム！」

白「ゴメンね。打たれちゃったよ」

本「真希は悪くないわ。私のサイン通りに投げただけだから。悪いのは私」

小「責任を背負い込む暇があるなら次のこと考えた方が良くないですか？」

大「雅。その言い方はないですよ」

川「そつスよ。ヒドイッス」

小「だってそうでしょう。終わったこと悔やんで何になるの？」

大「だからって」

串「いや、小山さんの言う通りだよ。過ぎたこと悔やむ暇があったら次のこと考えた方が良く。とりあえず守備シフトから決めませんか？」

本「確かにそうね。同点は仕方ないわ。定位置で一塁アウト優先で行こうと思うけど良いわよね？」

大「了解です」

川「わかったッス」

小「私は反対です」

串「俺も小山さんに同意です」

本「何なのよっ貴方たち！」

大「主将には従うのが普通ですよ！」

川「そつスよ！」

白「待って。反対するからには何か理由が有るんだよね？」

小「勿論です」

串「小山さんと同じ理由かもしれませんが有ります」

白「それ聞こうよ。怒るのはそれからでも遅くないよ」

## 第2の作戦

本「真希の言う通りね。ちよつと感情的になりすぎてたかも。理由教えてくれる？」

小「はい。2番にヒットが期待できない以上、相手の作戦はスクイズしかありません。定位置じゃあ間違いなく決まります」

串「前進守備ならスクイズでも本塁で刺す可能性も有りますし、相手がスクイズを諦めることも考えられます」

本「でも、次がチャンスに強い武じや意味無くない？」

小「彼は敬遠です。さらに言うなら李もです」

串「満塁にはなりますが、打者としてのレオンは怖くないです。フォースプレーになるのでスクイズされても刺せる可能性は高くなります」

本「不確定要素が多すぎじゃない？」

白「なるほどね。分かったよ」

本「！真希？こんな不確定要素が多い作戦を信じるの？」

白「何言ってるの。野球自体が筋書の無いドラマじゃない。不確定要素しかないよ」

本「はあ。付き合い長いからこうなったら真希が折れないことは知ってるわ。もう好きにしないさい。その代わり作戦通りに行かなかったから次からは私の作戦に従うこと！良いわね？」

小「もちろんです」

串「約束します」

前進守備を敷き2番の佐藤

審「ストライクアウト！」

小「(〃〃〃)までは作戦通り」

武「お願いします」

本「(さあ真希。敬遠よ)」

白「(オツケ〜)」

審「(ボールフォア)」

李「くそつ。この俺をなめやがって」

本「別に舐めてはいないわよ。能書きは打ってからね」

白「(どうせ敬遠するけどね〜)」

審「ボールフォア」

レ「舐めくさるのもいい加減にしろよ！」

本「なら打つてみなさい。(最初はこれで)」

白「(スローカーブだね)」

シユツ

レ「っ！」ギン

小「オツケー」バシツシユツ

串「ナイス」シユツ

審「アウト」

山「明法学園見事ピンチをしのぎました！満塁策成功！」

小「上手くいったね！」

串「ああ！」

本「：凄いわね貴方たち。今回は素直にお礼を言うわ。」

串「先輩は一人で背負い込みなんですよ。確かに扇の要ですしキャプテンですけどだからって一人で何でも背負い込む必要はありません。今みたいに人に頼つても良いんですから」

本「そうね。肝に命じるわ」

回は進み6回表1死ランナー無し

マ「願います」

本「(3度目の対決ね)」

白「(今度はどうする〜?)」

本「(最初はこれで)」

ビシュッ

マ「!」

バシッ

マ「(今のはムービングかよ。組み立てがまた読みにくくなったな。2球目は緩急使うためにスローカーブか?)」

本「(2球目はこれで)」

ビシュッ

マ「!」

バシッ

マ「(またムービングかよ。次こそスローカーブだろ)」

本「(最後はこれで)」

ビシュッ

審「ストライクアウト!」

マ「最後までムービング…」



本「（考えるバッターにはこれが一番効果的よね）」

6 回裏

レ「っ！」ビシュッ

審「ストライク！」

林「（なるほどな。第2の作戦の効果は出てきてるな。とりあえず2打席目でヒット打った串田と小山の前に塁にでないとな）」

いよいよ

ビシュッ

林「(これなら)コン

レ「バントかよ!」

山「セーフティバント成功!ノーアウト一塁!さあここでクリーンアップに回ります  
!」

武「(よりもよって串田か。足警戒してストレート中心にしたいが狙われると長打  
もあるな)」

永「(追加点のチャンス。無駄には出来ないわね。ランナーは走らせない。自由に打  
ちなさいな)」

レ「っ!」シュッ

串「えっ?」

審「ストライク!」

串「(球速落ちてるし球威も無いな!待球してスタミナ削った効果か)」

レ「っ!」シュッ

串「よしっ！」カキーン

山「打ったー！一塁線破ったー！ツーベース！ノーアウトランナー二塁三塁！」

本「さてと監督のサインは？」

永「スクイズは初回があるから警戒しているはず。前進守備だしね。外野フライで良いわよ」

本「了解！この球なら余裕よ。あとはどの外野に捕らせるかね」

レ「っっ！」シュッ

本「んっ！」キン

山「打ったー！ライトバックするー。捕りました。二塁三塁ランナータッチアップーからホームイン！大きな二点目だー！さらにチャンスは続きます！」

白「私はどうすれば？」

永「相手は動揺してはるはず。内野を前進させることもしてないのはその証拠ね。ならこれで」

レ「っっ！」シュッ

白「低いけどおあつらえ向きだよ」コンッ

山「あーっ！スクイズー！三点目だー！」

6 回終了し 3—0 と明法学園のリード

回は進み9回

白「ハア〜ハア〜」

本「真希？大丈夫？」

川「かなり疲れてるみたいだねー」

本「無理もないわ。シード校相手に無失点の力投だし。完封したいだろうけどマイクが先頭だし交代かしらね」

白「ゴメンね〜。今の私じゃ抑えきれないよ〜」

永「みずき。いつてらっしやい」

橘「やったー。やっと出番だよ！」

本「あまりはしやがないようにね。コントロールはしっかりお願い」

マ「(敗色濃厚だが俺が出て流れを変える)」

橘「えいっ！」 ビシユッ

マ「なっ！」

審「ストライク！」

マ「(前のピッチャーより遅いな！これなら打てるぜ！)」

橘「えいっ！」 ビシユッ

マ「っ！」 ブンッ

審「ストライク！」

マ「(今のはカーブか。持ち球は他にもあるのかわからないがストリート待ちで変化球ならファールで粘るか)」

橘「えいつ！」ビシュッ

マ「(スクリュー！)」ブンッ

審「ストライクアウト！」

マ「!?どうして当たらなかったんだ…」

本「(クレッツセントムーンだからよ)」

その後2、3番と連続三振でゲームセット！

部室にて

白「やった〜。夢みたいだよ〜」

川「私達強くなってるんだね〜」

本「自信は持って良いけど過信はダメよ」

その後も勝ち進みベスト8が出揃った。

## 準々決勝開始

永「準々決勝の相手は首都体育高校に決まったわ」

本「どんなチームなんですか？」

永「典型的な打撃のチームね。どの打者もホームランを打てるわ。守備はそれほどでもないけどね。ただ、ピッチャーは150キロ投げるからそれを打たないとね。4番にも要注意よ」

本「わかりました。ストレートで押すより変化球で躲したほうが良さそうですね」

準々決勝当日

スターティングメンバー

首都体育高校

- 1番 センター 筒井
- 2番 ピッチャー 堀
- 3番 ショート 五十嵐
- 4番 ファースト 野口
- 5番 レフト 関根

6番 ライト 金田

7番 サード 川井

8番 キャッチャー 西本

9番 セカンド 久保

明法学園高校

1番 センター 川崎

2番 レフト 林

3番 セカンド 串田

4番 キャッチャー 本条

5番 ファースト 白崎

6番 ショート 小山

7番 サード 大空

8番 ライト 美藤

9番 ピッチャー 早川

山「実況の山田です。明法学園は今大会初先発の早川選手を起用してきましたね」

田「解説の田中です。首都体育高校の強力打線相手に継投策も考えてということだと  
思います」

永「(もちろん継投も考えてるけどあおいの方が変化球中心だから良いのよね)」

本「今日も後攻よ。しっかり押さええてリズム作るわよ」

一回表

本「(継投もあるし全力で行きましょうか)」

早「(望む所です)」

本「(なら最初はこれで)」

ピシユ

筒「ストレート！貰ったぜ！」

ブンッ

審「ストライイク！」

筒「何っ?」

本「(マリンボールを初見で打てるわけ無いでしょ)」

いきなり戸惑った相手打線を三者凡退に仕留める

一回裏

川「出塁してくるよー」

ピシユッ

川「(速いねー)」



審「ストライク！」

ビシユッ

川「っ！」

キン

山「打ったー！センター前ヒット！ランナー出ました」

永「うん。良いわ。マシンで打ち込みやった効果が出てるわ」

数日前

永「今日からマシン打撃を多くするわよ」

林「珍しいですね。今までしなかったのに」

白「スピードはどうするんですか」

永「150キロよ」

串「次の対戦相手の球速ですね」

本「確かにストレートがかなり多いからストリート攻略すれば打てそうですね」

林「(さてと俺はバント練習もしたけど)」

永「(送ってアウト1つあげる必要ないわ)」

林「(なるほどな。アレか)」

ビシユ

川「(行くよー)」ダッ

野「走った!」

林「んっ!」

キン

山「あーつと!ヒットエンドラン!大きく開いた12塁間を抜けていきました!川崎は俊足を飛ばして3塁へ!ノーアウト13塁!」

串「(普段なら犠牲フライで良いんだけどこの試合じゃダメだな)」

本「監督。サイン出さない」と

永「必要ないわ。彼ならやるべきことはわかってるでしょう」